

屋久島から得られたイワハゼの記録

北尾圭梧¹

Author & Article Info

¹ 京都大学大学院理学研究科（京都市）
kitao.keigo.54x@st.kyoto-u.ac.jpReceived 03 February 2026
Revised 16 February 2026
Accepted 16 February 2026
Published 17 February 2026
DOI 10.34583/ichthy.64.0_31Keigo Kitao. 2026. First record of *Glossogobius illimis* from Yaku-shima island, Kagoshima Prefecture, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 64: 31–33.

Abstract

A single specimen of *Glossogobius illimis* Hoese and Allen, 2012, collected from Yaku-shima island, Kagoshima Prefecture, Japan, represents the first record of the species from the island. The specimen of *G. illimis* was characterized by 9 dorsal-fin soft rays; 19 pectoral-fin soft rays; 13 predorsal scales; 5 longitudinally aligned single rows of sensory papillae on cheek; absence of transverse rows of sensory papillae on cheek; infraorbital branching of a row of sensory papillae from upper jaw to canal pore F; two small additional pores between G and H' on oculoscapular canal; absence of black dots on nape; absence of dark band from posteroventral margin of eye to preopercle; and longitudinal 5 dark spots on lateral side of body.

イワハゼ *Glossogobius illimis* Hoese and Allen, 2012 は、東インド洋と西太平洋の熱帯・亜熱帯域に広い分布域をもつ熱帯・亜熱帯性の小型ハゼ科魚類であり、河川中流域から感潮域上端にかけての淡水域に生息する (Hoese and Allen, 2012; 鈴木, 2021)。日本においては沖縄島以南が主分布域とされ、奄美群島以北では安定した個体群を維持できていない可能性が指摘されていることから (米沢・四宮, 2016; 前田, 2017; 是枝・本村, 2022), 分布北限域における出現状況を注視する必要がある。

2025年10月に、屋久島北西部の一湊川において1個体のイワハゼが採集された。本種は屋久島で確認された陸水性魚類についてとりまとめた Motomura and Matsuura (2010), Motomura and Harazaki (2017), 古橋ほか (2023) において記録されていない。当該標本はイワハゼの屋久島

からの初めての記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

右の胸鰭の一部を切り取って99%エタノール中に保存後、魚体をホルマリン水溶液で一週間以上固定した。その後、エタノール水溶液に置換し、1週間以上保存した標本を計数・計測に供した。計数・計測の方法と項目は、明仁親王ほか (1984), 渋川ほか (2017), および是枝・本村 (2022) にしたがった。双眼実体顕微鏡下で計数・計測を行ない、デジタルノギスを用いて0.1 mm単位まで計測した。頭部感覚器官は、サイアニンブルーで一時的に染色して観察し、頭部管開孔の名称は、明仁親王ほか (1984) にしたがった。背鰭、臀鰭、および尾鰭の鰭条と脊椎骨は、軟X線写真により計数した。標準体長はSLと表記した。イワハゼの学名は是枝・本村 (2022) にしたがって *Glossogobius illimis* とし、本種が記載された *Cybum* 35巻4号は、是枝・本村 (2022) にしたがって2012年に公表されたものとして扱った。本報告に用いた標本は、京都大学総合博物館 (FAKU) に登録・所蔵されている。

Glossogobius illimis Hoese and Allen, 2012

イワハゼ

(Fig. 1)

標本 FAKU 212592, 1個体, 50.9 mm SL, 鹿児島県熊毛郡屋久島町・一湊川下流域, 水深0.6 m, 2025年10月19日, 手網, 北尾圭梧。

記載 背鰭鰭条 VI-I, 9; 臀鰭鰭条 I, 8; 胸鰭鰭条 19; 腹鰭鰭条 I, 5; 尾鰭分節軟条 9+8; 尾鰭分枝軟条 6+6; 縦列鱗数 32; 横列鱗数① (臀鰭起点~第1背鰭基底) 10; 横列鱗数② (臀鰭起点~第2背鰭基底) 9; 横列鱗数③ (第2背鰭起点~臀鰭基底) 8; 背鰭前方鱗数 13; 腹鰭前方鱗数 7; 尾柄周囲鱗数 11。各計測値のSLに対する割合 (% of SL): 頭長 32.3; 頭高 16.9; 吻長 10.3; 眼径 6.8; 両眼間隔 2.3; 上顎長 12.8; 体高 18.3; 体幅 17.3; 肛門前長



Fig. 1. Fresh specimen of *Glossogobius illimis* (FAKU 212592, 50.9 mm SL) collected from Issou-gawa river, Yaku-shima island, Kagoshima Prefecture, Japan.

53.7; 第1背鰭前方長 38.1; 第2背鰭前方長 57.9; 臀鰭前方長 59.4; 腹鰭前方長 32.3; 尾柄長 25.4; 尾柄高 10.8; 第1背鰭基底長 15.6; 第2背鰭基底長 20.5; 臀鰭基底長 18.0; 第1背鰭最長棘長 (第2棘) 17.0; 第2背鰭棘長 13.5; 第2背鰭最長軟条長 (第2軟条) 16.0; 臀鰭棘長 8.6; 臀鰭最長軟条長 (第6軟条) 14.6; 胸鰭長 22.8; 腹鰭長 22.1; 尾鰭長 25.2.

体は前後方向に細長い円筒形で、頭部はやや縦扁し、尾柄部はやや側扁する (Fig. 1)。体背縁の輪郭は、吻端から第1背鰭起部にかけて上昇し、そこから第2背鰭起部までは体軸にほぼ平行。第2背鰭起部から尾鰭基底まではゆるやかに下降する。体腹縁の輪郭は、下顎先端から腹鰭起部にかけてゆるやかに下降し、そこから臀鰭起部までは体軸にほぼ平行。臀鰭起部から尾鰭基底まではゆるやかに上昇する。

眼は頭部側面の上方に位置し、眼径は吻長よりも小さい。吻は丸みを帯びるがやや突出し、下顎先端は上顎先端よりも前方に突出する。口裂は下位で、上顎後端は眼の前縁直下をこえる。鼻孔は2対で、前鼻孔は短い管状であり、後鼻孔は楕円形; 両鼻孔はやや離れ、前鼻孔は上顎上縁付近に、後鼻孔は眼のやや前方に位置する。背鰭前方鱗数は13で、両眼間隔の後縁にわずかに達しない。項部を除く頭部と胸鰭基底前方は無鱗。躯幹部は、腹鰭基部前方の腹面が円鱗で覆われ、それ以外の躯幹部および尾柄部が櫛鱗で覆われる。

第1背鰭起部は腹鰭基底後端の直上よりもやや後方に位置する; 第1背鰭は三角形で、第2棘が最長。第2背鰭起部は臀鰭起部の直上よりもわずかに前方に位置し、第2背鰭基底後端は臀鰭基底後端の直上よりもやや後方に位置する; 第2背鰭と臀鰭はともに平行四辺形に近く、倒してもそれぞれの後端が尾鰭基底に達しない。胸鰭基底は鰓膜のやや後方に位置し、上端と下端はほぼ同一垂線上に位置する; 胸鰭は前後方向に長い楕円形で、後端は第1背鰭基

底後端の直下に達する。腹鰭起部は胸鰭基底直下よりもわずかに前方に位置し、腹鰭後端は第1背鰭第5棘の直下に達する; 腹鰭は左右の鰭膜が癒合して吸盤状となり、膜蓋は発達する。尾鰭は截形で後縁はやや丸みを帯びる。背鰭担鰭骨と脊椎骨の関係 (P-V) は 3/II III I 0/9。

頭部感覚管開孔は前眼肩甲管に B', C (S), D (S), E, F, G, H' を、後眼肩甲管に K', L' を、前鰓蓋管に M', N, O' をもつ。開孔 G と H' の間には2個の小さい付加開孔 a1 と a2 をもつ。眼の直下に1本、頬部に5本の単列縦列孔器をもつ。鰓蓋に発達した単列の横列孔器を1本もち、上部と下部において後方に向かってそれぞれ1分枝する。

色彩 固定直後の色彩 (Fig. 1) — 躯幹部および尾柄部の背面の地色は暗い黄土色、側面から腹面の地色は透明感のある薄い茶色で、躯幹部の腹面は特に白みが強い。胸鰭の後方から尾鰭基底にかけて、眼径よりもやや大きく、前後方向に長い楕円形から長方形の黒色斑がおおむね等間隔に5個縦列し、その間には瞳孔径よりも小さい黒色斑が散在する。体側の5黒色斑上方の側面から背面にかけては、瞳孔径と同程度かやや小さい黒色斑が集まって不明瞭な4個の鞍状斑となり、5黒色斑と互い違いになるように分布する。5黒色斑下方の側面には、鱗の基部を縁取るように黒色素胞が集まり、瞳孔径よりも小さな黒色斑として散在する。頭部は黄色を帯びた茶色で、眼の前縁下部から上顎中部にかけて黒色縦帯が斜走し、頬部には4本の黒色縦線がある。瞳孔は黒色で、虹彩は黄色を帯びた銀白色。

胸鰭は基部上端と基底下端の前方にそれぞれ1個の黒色斑がある; 軟条には基部から中部にかけて不明瞭な3本の暗色横帯があり、中部から先端と鰭膜は透明。腹鰭は棘、鰭膜ともに白色半透明。第1背鰭は棘、鰭膜ともに地色は白色半透明; 第1棘から第5棘は基部と中点付近が赤色で、先端が黄色を帯び、第6棘は先端のみ赤色; 第2棘前方の鰭膜は先端部が赤色を帯びる; 第5棘後方の鰭膜基部に眼径と同程度の大きさの1個の黄色斑がある。第2背鰭は棘、

軟条、鰭膜のいずれも地色は白色半透明で、基部から中点付近にかけて3個の赤色斑があり、3本の乱れた赤色縦帯となる；鰭膜の基部1/3程度は黄色を帯び、縁辺は淡い赤色を帯びる。臀鰭は棘、軟条、鰭膜ともに地色は白色半透明；鰭膜は基部から中部まで黄色を帯び、第6軟条以降では先端付近まで黄色を帯びる。尾鰭は棘、鰭膜ともに白色半透明で、上縁と下縁は黄色がかかる；軟条には基部から先端にかけて2-5個の赤色斑があり、乱れた数本の赤色横帯状になる。

分布 本種は東インド洋と西太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布し (Hoese and Allen, 2012), 国内においては鹿児島県薩摩半島 (是枝・本村, 2022), 大隅諸島 [種子島 (Sakai et al., 2001)], 奄美群島 [奄美大島 (四宮・池, 1992; 吉郷, 2014), 加計呂麻島 (吉郷, 2014)], 沖縄諸島 [沖縄島 (明仁ほか, 1993; 鳥居ほか, 2011)], 宮古諸島 [宮古島 (明仁ほか, 1993)] および八重山諸島 [石垣島 (明仁ほか, 1993; 吉郷, 2014), 西表島 (明仁親王・目黒, 1975; Hoese and Allen, 2012; 吉郷, 2014), 与那国島 (吉郷, 2000)] から記録されていた。本研究により、大隅諸島の屋久島からも本種が記録された。

備考 記載標本は背鰭軟条数が9であること、胸鰭軟条数が19であること、背鰭前方鱗数が13であること、頬部に単列の縦列孔器が5本あり、横列孔器がないこと、上顎から感覚管開孔Fに向かう孔器列が眼下で分枝すること、感覚管開孔GとH'の間に2個の小さい付加開孔a1とa2があること、鰓蓋上部の後方に向かう孔器列が分枝しないこと、鰓蓋下部に短孔器列群がないこと、下顎先端にヒゲがないこと、体側に縦長の5暗色斑があり、体側後半の暗色斑が長円形で明瞭であること、眼後縁下から頬に斜走する暗色斑がないこと、および項部背面に黒色点がないことなどが明仁親王・目黒 (1975), Hoese and Allen (2012), 明仁ほか (2013), および是枝・本村 (2022) の示したイワハゼ *Glossogobius illimis* の標徴に一致し、本種に同定された。

本標本は一湊川下流域の純淡水域において、水深約60cmの流れの緩やかな礫底から採集された。イワハゼの確認例は分布の項に示したとおりであり、本報告に用いた標本は、イワハゼの屋久島からの初めての記録となる。

謝 辞

京都大学大学院理学研究科の渡辺勝敏博士には、標本作製と計測にあたり機材をお貸しいただき、軟X線写真の撮影にご協力いただいた。同研究科の片山優太氏、浜橋 丈氏、高田喜光氏には現地での採集と標本写真、軟X

線写真の撮影にご協力いただいた。Ichthy 編集委員の藤原恭司博士には原稿の改訂にあたって適切なお助言をいただき、京都大学総合博物館への標本の登録にもご協力いただいた。この場をお借りし、厚く御礼申し上げる。

引用文献

- 明仁・岩田明久・坂本勝一・池田祐二. 1993. ハゼ亜目, pp. 997-1116, 1355-1365. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 東海大学出版会, 東京.
- 明仁・坂本勝一・池田祐二・藍澤正宏. 2013. ハゼ亜目, pp. 1347-1608, 2109-2211. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 明仁親王・林 公義・吉野哲夫・島田和彦・瀬能 宏・山本隆司. 1984. ハゼ亜目, pp. 228-276, pls. 235-258. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編) 日本産魚類大図鑑 (解説). 東海大学出版会, 東京.
- 明仁親王・目黒勝介. 1975. 西表島で採集されたイワハゼ (新種) *Glossogobius celebius* について. 魚類学雑誌, 21: 227-230.
- 古橋龍星・是枝伶旺・本村浩之. 2023. 大隅諸島の種子島と屋久島から得られた淡水・汽水性魚類15種の記録. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 29: 20-33.
- Hoese, D. F. and G. R. Allen. 2012. A review of the amphidromous species of the *Glossogobius celebius* complex, with description of three new species. Cybium, 35: 269-284.
- 是枝伶旺・本村浩之. 2022. 薩摩半島から得られた北限記録となる熱帯・亜熱帯性ハゼ科魚類3種 (トサカハゼ, スダレハゼ, イワハゼ). Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 26: 4-17.
- 前田 健. 2017. アゴヒゲハゼ, pp. 256-257. 沖縄県文化環境部自然保護課 (編) 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物. 第3版 (動物編) レッドデータおきなわ. 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇.
- Motomura, H. and S. Harazaki. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yaku-shima island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 9: 1-183.
- Motomura, H. and K. Matsuura. 2010. Fishes of Yaku-shima Island - A World Heritage island in the Osumi Group, Kagoshima Prefecture, southern Japan. National Museum of Nature and Science, Tokyo. viii + 264 pp.
- Sakai, H., M. Sato and M. Nakamura. 2001. Annotated checklist of the fishes collected from the rivers in the Ryukyu Archipelago. Bulletin of the National Science Museum, Series A, Zoology, 27: 81-139.
- 渋川浩一・武藤文人・鈴木寿之・藍澤正宏. 2017. 浜名湖から得られたハゼ科サルハゼ属の1未記載種と日本産同属魚類の分類の状況. 東海自然誌, 10: 43-55.
- 四宮明彦・池 俊人. 1992. 奄美大島における陸水域の魚類相. 鹿児島大学水産学部紀要, 41: 77-86.
- 鈴木寿之. 2021. イワハゼ, p. 223. 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾 (編) 新版 日本のハゼ. 新訂・増補版. 平凡社, 東京.
- 鳥居高志・塩根嗣理・加藤憲一・杉浦幸彦・黒川忠之・大野正博・大城朝一・新垣敏一. 2011. 河口閉塞による感潮域魚類相への影響. 応用生態工学, 13: 123-139.
- 米沢俊彦・四宮明彦. 2016. イワハゼ, p. 105. 鹿児島県環境林務部自然保護課 (編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動物植物 動物編 - 鹿児島県レッドデータブック 2016 -. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.
- 吉郷英範. 2000. 与那国島 (琉球列島) の陸水性魚類. 比和科学博物館研究報告, 39: 165-179.
- 吉郷英範. 2014. 琉球列島産淡水性魚類相および文献目録. Fauna Ryukyuan, 9: 1-153.